

間重富のオランダ語

千葉商科大学商経学部 渡辺憲昭(watanabe @ cuc.ac.jp)

272-8512 千葉県市川市国府台 1-3-1

1. はじめに

高橋至時(1764.12.22～1804.2.15)の死去を承け、1804年5月12日にその長子・高橋景保 (1785.?.?～1829.3.20)が天文方に就いた。景保はまだ若年であったので、間重富(1756.4.7～1816.4.21)が大坂より呼び出され、1804年11月30日、景保の補佐とともに、『ラランデ暦書』の翻訳を命ぜられた([1]～[4])。

国立天文台の貴重図書に、『ラランデ暦書』を間重富が訳したとされる『ラランデ暦書訳述』6冊がある。この『訳述』の日本語訳を見てみると、重富はオランダ語を理解して訳したとはとても思えない。

そこで、本論文では『訳述』の最初の部分である「七曜總説」の日本語訳をストラッペのオランダ語原文と比較することにより、重富がオランダ語の構文あるいは文法をどの程度理解していたのかに関して検討する。

2. 江戸におけるオランダ語学習の系譜と間重富

江戸におけるオランダ語学習は青木昆陽(1698.6.19～1769.11.9)に始まる。昆陽は1740年に初めて和蘭商館長に会い、疑点をただした。従って、彼がオランダ語の学習を始めたのはそれよりも以前である。昆陽は和蘭商館長以外に、蘭通詞・吉雄耕牛(1724.?.?～1800.10.4)などにもオランダ語の手ほどきを受けた。木村によれば、昆陽がオランダ語の学習を始めたのは吉宗の命によると言う通説は誤りである([8], pp.104～106)。昆陽は長崎遊学を希望していたがはたされなかった。

前野良沢(1723.?.?～1803.11.30)が昆陽に入門したのは、良沢40歳を過ぎてからである(1766年または1769年の2説がある[6], p.20)。良沢は1769年後半から100日ほど長崎に滞在し、吉雄耕牛や榎林栄左衛門¹などなどの蘭通詞にオランダ語を学び([9] p.53)、700語ほどを暗記した([10], p.100)。

1. 榎林栄左衛門の生年と没年は調べたけれども判明しなかった。

大槻玄沢(1757.11.9～1827.4.25)は1780年に良沢に入門し、蘭語の話法訳法を学んだ。玄沢は1785年から翌年にかけて長崎へ遊学し、吉雄耕牛、本木良永(1735.7.30～1794.8.12)、志筑忠雄(=中野柳圃, 1760.?.?～1806.8.16)らの蘭通詞と交流した。志筑忠雄がオランダ語文法の研究をまとめた『和蘭詞品考』を著したのは1804年頃²であるので、玄沢はオランダ語文法を学ぶことはなかったようである。志筑文法は忠夫の弟子である馬場佐十郎(1787.?.?～1822.9.12)に受け継がれ、1808年に馬場佐十郎が天文台勤めを命じられたことにより江戸にもたらされた。

1790年頃、間重富と蘭方医・小石元俊(1743.?.?～1809.2.9)は橋本宗吉(1763.?.?～1836.6.14)を芝蘭堂に入塾させオランダ語を学ばせた。寛政10年(1798)の蘭学者相撲見立番付によれば橋本宗吉は西小結である(番付の最高位は大関, [11])。

間重富がいつ頃・誰からオランダ語を学んだかに関してははっきりしないようである。時期としては改暦御用で江戸へ立つ(1795)前か、あるいは改暦が終わって大坂へ戻って(1798)からのいずれかであると考えられる。この場合、重富にオランダ語を教授したのは橋本宗吉であろう。景保の補佐として江戸へ出た(1804)後であるとすれば、玄沢あるいは玄沢の弟子から学んだと推量される。1802年、重富は日月食観測のため長崎に1ヶ月ほど滞在した折りに、志筑忠雄の弟子・末次忠助(1765.?.?～1838.12.15)に天文学上の質問をしている([1]～[3])。

3. 馬場佐十郎以前の江戸におけるオランダ語学修法

馬場佐十郎が文法に基づく蘭文解釈法を江戸にもたらすまでは、江戸における蘭文学修法は青木昆陽に始まる漢文訓読法的蘭語解釈法によるものであった。『蘭学階梯』によればそれは次のような方法である([6], pp.32～39)。

- ① 出来るだけ多くの単語を暗記する(400～500語を覚えればなんとか理解出来る)
- ② 節用集(=単語帳)をつくる
- ③ 単文から学習を始める
- ④ 蘭文解読の際は助語³に気を配り、前後上下の語路に習熟する
- ⑤ 文の各語の下に訳語を当てる。単語集にない語には○を付けておき、後で先輩に尋ねる。意味がわかったら、単語帳に付け加える

2. 同書の成立は1780年頃とし、志筑文法の完成は1790年代とする説もある([6] p.81)。

3. 助語とは、冠詞、前置詞、接続詞、代名詞、助動詞など用法の不明な語。

⑥ 先生から訓読方法を教わり、その後は自然に氷解するまでひたすら訓読する

次の2例文は『蘭学階梯』に示された例文である。

オウデン サル メン エ | レン ヨンゲン サル メン レ | レン
i) **Ouden zal men eeren, jongen zal men leeren.**
老 可 人 敬 少 可 人 習
老タルヲハ敬フベシ少ヲハ習ワスベシ

エット ソウ ヤムメルレイキ フェ | セン ソ | スコ | ン ゲレ | ゲンテイト テ フルソイゲン
ii) **T zou jammerlyk weefen, zo fchoon gelegenheid te verzuigen.**
應マサニ 悔後 此シカク 清 閑 過
空閑ニテ徒ニ過ンハ後ニ悔ベシ

例文 ii) は『蘭訳荃』では次のような文と訳とになっている([9]).

エト ソウ ヤムメルレイキ ウェセン ソヲ エ、ン スコヲネ ゲレゲンテイト テ フルゾイメン
iii) **'t Zou jammerlijk weesen, zo een schoone gelegenheid te verzuymen.**
悔後 一 清 閑暇 過
清閑ナル時ヲ徒ニ過ルハ最後悔スベキコトナリ

例文 i) の zal (原型 zullen) は助動詞(助語)である。直訳すれば「人は老人を敬うべきである、人は少年を教えるべきである」であるので、玄沢の訳は当たらずと雖も遠からずといえる。

例文 ii) と iii) の zou (原型 zullen) は助動詞、te は前置詞で共に助語。文意は「このような好機を逃すということは残念(なこと)であろう」であるので、玄沢の訳よりは良沢の訳のほうが近い。

例文 ii) に見られる **verzuigen** はハルマ『蘭仏辞典』にも古いオランダ語が調べられるネット上の辞書[13]にも載っていない。発音を「フルソイ~~ゲン~~」としているので綴りの間違いとは思えない。

4. ラランデ暦書訳述

国立天文台図書館貴重資料の中に『ラランデ暦書訳述』全6冊がある([13])。これは『ラランデ暦書』(= Astronomia of Sterrekunde) を間重富が訳した自筆稿本であるとされて

いるが、[2]にはこの本のタイトルが見当たらない。渡辺は間重富が 1804 - 1809 に掛けて訳したものとして『ラランデ暦書訳解』が挙げている([2])。中村・伊藤は、『ラランデ暦書訳述』は高橋至時の『ラランデ暦書管見』を間重富が筆写したものの異本であると推定している([15], p.19)。

1冊目に訳されているのは §83 から §112 までで、『ラランデ暦書管見』には見当たらない章である。2冊目から6冊目までは『ラランデ暦書管見』において訳されている章が多い。

間重富が『ラランデ暦書』を訳したのは1804年以後であるので『ラランデ暦書訳述』は時期的にもまた訳文のできから考えても、馬場佐十郎の助けは得ていない物と思われる。

5. 間重富のオランダ語理解

ここでは『ラランデ暦書訳述』の中の最初の章 §83 における訳文と『ラランデ暦書』のオランダ語原文とを比較することにより、間重富がどの程度オランダ語を理解していたかを検討する。天文方にはハルマ『蘭仏辞典』もその翻訳である『江戸ハルマ』も備えてあったようであるが、以下の和蘭文の下に記した単語の訳は『江戸ハルマ』に載っている訳である([13];ただし、松田によれば『江戸ハルマ』は誤訳だらけである)。

Van de Planeeten of Dwaal-sterren in 't algemeen.

七曜 惑星 惣テ、大抵

83. De eerfte van alle hemelfche bewegingen, **welke** de menfchen
最初 悉 天ノ 動ク ソレハ、コレハ 人

waargenomen hebben, is de dagelykfche beweeging(§2), **die** gemeen is
念入テ守ル 有る 是、彼 庸劣

aan den gantfchen hemel;
悉、惣

七曜總説

第八十三章

是ノ天ノ運動ヲ悉ク最初ニスル**其ノ最初ニスルモノ**ハ人ノ**測量ヲ**最初に**持ツナリ**

是ノ毎日ノ運動ハ第二章ニ言フ如ク常ニ**夫レ**總天ニ於ル者ニシテ

welke と die は関係代名詞である。訳文を見てみると、**関係代名詞の用法は理解している**と思われる。waargenomen は waarnemen(vt. 気づく)の過去分であるが、「測量」と解釈している。waarneming は「観察、観測」の意味であるが、『ラランデ暦書』の中では「測量」の意味で使われている場合があるので、waargenomenを「測量」としているのはこれからの類推かもしれない。訳文から、**完了形は理解していない**ことがわかる。

文意

天球の全運動の中で人間が**気づいたところの**最初の運動は全天に共通する**ところの**日周運動である(§2)；

de eigentlyke bewegingen van Zon en Maan waaren vervolgens de
符号 動ク 太陽 月 次々ニ、此後
gemakkelykfte **om** **waar te nemen** ; eidelyk de dikwils herhaalde en
安シ、容易 巡ル、辺リ 念入テ守ル 最後 度々 再ヒ話ス
geduurige waarneemingen **hebben doen** **zien** ; **dat** …
休止セス 強テ守ル 有ル 行ウ、勤メル 見ル

何處ノ太陰ト太陽モ自行ヲ此次ニ**周圍ニ相應シ取ル**

毎度ニ相等キ再話シテ而モ毎度ニ測量ヲ**持つ行くク見ヨ**

waaren は zijn [=独 sein] の過去形であり、om waar te nemen は分離動詞 waarnemen の不定法である。訳文を見てみると、**zijn の過去形も分離動詞の不定法も理解していない**と思われる。heben doen zien 使役動詞 doen の完了形である。訳文からは、**使役動詞もその完了形も理解していない**ことがわかる。

文意

太陽と月の固有運動[順行のこと]は(日周運動の)次に容易に**気づくべき**ものであった；最後に、しばしば繰り返された連続した観測は**dat以下のことを気づかせた**；

dat 'er onder de sterren, **welken** in een donkere nacht⁴ aan den hemel
彼処 其間ニ 星 一 闇 夜 天
flonkeren, **vyf**⁵ **gevonden worden**, **waar van** de eigentlyke beweeging
光暉 五 為ル 符号 動ク
zich ook kenbar maakt, en **welke** men Planeeten(a) of

4. een donkere nacht(暗い夜) は Lalande の本では une belle nuit(晴れた夜)

5. vyf(5) は Lalande の本では six(6). この後に言及している惑星は水・金・火・木・土の5惑星であるので、Strabbe は5に訂正したのであろう。

彼目ヲ 亦 顕ル 為ス 人 七曜 又、與

Dwaal-Sterren heeft genoemd.

惑星 名ツケタ

其測量ヲ持ツハ恒星ノ下ニ早キ星ナリ其早キ星ナルモノハ一ニ闇夜ニ於テ天ノ光明[天ノ光明ハ恒星天ノ光ナリ]ニ向ヒ五星ヲ尋求ヲ為セ[此ニ五ト言フ五星ト不言ズ總テ此章ビ光暉ト言フテ星トワザル者ハ星光ハ人目ニ唯々光ヲ見テ形ヲ不見ス故ニ此ニ星不言ス益シ星體ヲ見ルハ遠鏡ノ作フル後ナリ其今ヲ知テ古ヲ忘ル勿レト云]其五ナル者ノ自行ハ自ラ顯然トシテ自由ニ撰ム而シテ其ノ五ツナル者ハ迷星ニシテ「ブラ子ーテン」[㊦]ト名ツケ持ツ

上述したように、関係代名詞は理解しているが、完了形は理解していないのが確かめられる。 vyf gevonden worden は受動態であるが、訳文から見られるように、受動態は理解していない。

Strabbe の訳本において(も Lalande の仏語原本においても), Planeeten の註(a)としてギリシア語の綴りと意味を載せているが、どちらも綴りは Πλανήτης ではなく Αλανήτης となっている。これは Π と Α の筆記体における混同から来ているらしい。

重富訳の註[㊦]では

註[㊦]曰「ギリシヤ」ニ「エルラチキユス」ハ迷フナリ 是レ此ノ星ノ天ヲ廻リ明ニ迷フ如シ

となっている。 erraticus をギリシア語と誤解している点以外、正しく理解している。

文意

闇夜に輝くところの星々の中に再びその(五つの星の)固有の運動[順行, 逆行のこと]に気づかせる五つの星が見いだされ, それを人々はプラネーテンすなわち惑星と名付けた;

Deeze Dwaal-Sterren zyn somtyds glansryker dan de andere Sterren,
此 惑星 時々 光ノ多キ ヨリモ 他ノ 星

doch van een flauwer licht, en zonder eenige fchittering (miffchien
分明ナラヌ 光暉 無シ 独 光リ 償,若クハ

behalven Venus), daar, in tegendeel, de vaste Sterren een uitstraalend
其他ニ 彼処 相反スル 光ヲ放ツ

en levendig licht verspreiden, ...

敏捷 公然ト顯ス

此ノ五星ノ迷星ハ常ニ恒星ヨリ光ノ多キ者ナリ然レトモ光暉ハ淡薄ニシテ且ツ光明ノ微ニハ非ス(金星ノ償ヒハ此ノ外ナリ)[金星ハ光甚ダ強シ]彼ノ迷星ノ處ノ相変ル[不同ト言フ意]ニ於テハ不動星ト活動トノ光ノ廣大ナルヲ一ニ推等スル[活動ノ光ハ即五星ナリ其光ノ廣大ニシテ恒星ニ異ニスル]

een flauwer licht (より弱々しい光) はフランス語原本では une lumière tranquille (落ち着いた穏やかな光). glansryker dan は dan の有る比較, een flauwer licht は dan のない比較である. 訳文から, dan の有る比較に関しては理解しているが, dan のない比較に関しては理解していないことがわかる.

文意

時に, これらの惑星は他の星々よりも明るくなるが, (他の星々よりも)弱々しい光であり一つの瞬きもない(恐らく金星は別)が, 一方反対に恒星はキラキラ輝く光を放ち, …

以上, オランダ語原文と間重富による訳文との比較より, 間重富のオランダ語に関して次のようなことがいえる.

- ① 関係代名詞は理解している.
- ② dan の有る比較は理解しているが, dan のない比較は理解していない.
- ③ 完了形は理解していない.
- ④ zijn の過去形も分離動詞の不定法も理解していない.
- ⑤ 使役動詞もその完了形も理解していない.
- ⑥ 受動態は理解していない.
- ⑦ 格, 時制, 仮定法・条件法・接続法等の理解に関してはこれだけでは判然としない.
- ⑧ 『江戸ハルマ』の訳語は必ずしも使われていない.

文献

- [1] 上原久, 高橋景保の研究, 講談社, 1977
- [2] 渡辺敏夫, 近世日本天文学史(上), 恒星社厚生閣, 1986

- [3] 渡辺敏夫：天文暦学史上における間重富とその一家，山口書店，1943
- [4] 嘉数次人：天文方のラランデ天文書研究，天文月報，Vol.98，No.5，pp.310－316
- [5] 片桐一男：阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者たち，1970，法政大学学術機関リポジトリ；<http://repo.lib.hosei.ac.jp/browse?type=author&value=片桐%2C+一男>
- [6] 茂住實男：洋語教授法史研究，学文社，1989
- [7] 『蘭学階梯』<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537565> (国会図書館デジタルアーカイブ)＝松村明 校注，洋学 上，日本思想体系64，岩波書店，1976
- [8] 木村陽二郎：日本自然誌の成立，中央公論，1974
- [9] 前野良沢：蘭訳荃，大分県先哲叢書，前野良沢 資料集，第2巻，大分県立先哲史料館，2009. この巻には『蘭学階梯』も集録されている.
- [11] 蘭学者相撲見立番付，早稲田大学図書館：http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i05/i05_01646/i05_01646_0010/i05_01646_0010_p1004.jpg
- [12] Historische woordenboeken op internet：<http://gtb.inl.nl/>
- [13] 早稲田大学図書館蔵『江戸ハルマ』全文画像：http://www.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/b08_a0209_all/index.html. 松田清によれば，これは稲村三伯編の木活字本(ただし，訳は手書き)ではなく筆写本である(*cf.* <http://d.hatena.ne.jp/tonsa/20090321/1237650811>).
- [14] ラランデ暦書訳述，国立天文台図書館/貴重資料/文庫・コレクション/和漢書目録：<http://library.nao.ac.jp/kichou/archive/0494/kmview.html>
- [15] 日本の天文学の歩み ― 世界天文年2009によせて：東京大学附属図書館特別展示，展示資料目録，東京大学附属図書館，2009